

## 2. 杉正俊『郷愁記』とふたつの故郷

依岡 隆児

### 1. はじめに

青春は郷愁と結びつきやすい。青春とは過ぎ去ったのちに回顧されるものであるが、近代化の中で「故郷喪失（ハイマートロス）」意識を抱いていた日本の若者たちは青春にあらかじめ「郷愁」を抱いていたのかもしれない。その一方で、大正から昭和前期に「ハイマートロス」というドイツ語が定着していたように、「ふるさと」＝「ハイマート」概念自体がドイツからの影響を強く受けていた。<sup>1</sup>したがって、当時の若者たちの「郷愁」もドイツ・ヨーロッパの色合いを多分に帯びていたと考えられる。

かつてその青春の場であり郷愁の対象だった旧制高校には、いわゆる硬派といわれるバンカラ学生ばかりではなく、哲学探究型学生の一群もいた。旧制高校はこうしたタイプの違った者たちが集まる場でもあった。<sup>2</sup>だが、同窓会誌などで目につくのはバンカラな方の旧制高校の懐古談で、そこからは「知的学生」の声はなかなか聞こえてこない。ことに戦時中における思想弾圧のもとではそうした声はすっかりかき消されていた。ただ旧制高校で実施された愛読書アンケートのランキングから、かろうじてそうした知的学生の思いが聞きとれるばかりである。

現在ではほとんど忘れられている杉正俊の『郷愁記』は、戦時中にその旧制高校や大学で読まれ、大きな共感が寄せられた。これは愛媛県出身で哲学研究者としてドイツに留学し結核となって不本意なうちに亡くなった人の日記を編纂した本だが、たとえば昭和17（1942）年の第八高等学校における「感銘を受けた本」調査でトップに挙がっている。<sup>3</sup>また、昭和18年1月29日の朝日新聞の記事「戦時にも古典が優勢」では、日本女子大の「読書調べ」で夏目漱石や島崎藤村らと並んで「その他によく読まれた本」として『郷愁記』が挙がっていると報じられている。昭和15年の『関西大学学報』第179号の木島志朗「新刊書架に拾ふ」でも取り上げられ、「若き新鋭学徒杉正俊氏は運命への激しい戦の裡に故国へ魂の生還をした運命の哲学者であつた。この書は同氏の鋭い熱情を秘めて書き残された。氏の哲学『運命への戦い』の記録である。哲学への郷愁、強い学問への情熱、それは現実に

<sup>1</sup> 依岡隆児「旧制高校から見た青春概念の形成」『東アジアにおける知的交流 キイ・コンセプトの再検討』（『国際シンポジウム』第44巻）国際日本文化研究センター、2013年

<sup>2</sup> ローデンは「哲学的かつ個人の人生の探究時期として、総合的につくられた『校風』や新しい『青春』観念の認識によって、学内の硬派の連中と知的学生の間では、最終的には親密な和解をみる」（『友の憂いに吾は泣く—旧制高等学校物語』（上）講談社、1983年、23頁）と述べ、硬派のバンカラ型と知的で哲学探究型には、ともに校風や青春という点で共有できるものがあり、それが旧制高校を特徴づけていたとしている。

<sup>3</sup> ノーベル書房編集部編『ああ青春デ・カン・ショ～旧制高等学校物語～』ノーベル書房、1968年、191頁

躍り出ずる凡ゆる社会事象をば白雲にそそぐ強烈な日光の如く溶し去つて行く。この戦ひとつた苦闘の跡には著者のひたむきな研究の決意がにじみ出て我々は著者の鋭い筆致に心洗はれつつ読み行く中に眼頭があつくなつて行くのを如何ともなし得ない」と紹介されている。さらに、昭和16年の旧制水戸高等学校における「感銘を受けし書物」の第6位に、昭和19年の第五高等学校での読書調査「感銘を受けた書物名」の13位になっている。<sup>4</sup>

本稿ではそこで、戦時下の旧制高校で愛読されたこの杉正俊の『郷愁記』を取り上げ、ドイツとの関連で「郷愁」をとらえ直し、哲学的憧れと故郷（愛媛）への思いに引き裂かれた、戦前におけるもうひとつの青春を跡づけることを目的とする。以下、その成立と著者について述べたうえで、内容を分析しつつ、この本が若者たちの間でいかに受容されてきたかを考察する。

## 2、『郷愁記』について

著者である杉正俊とは、いかなる人物だったのだろうか。杉に関する文献・資料としてかろうじて見つかるのは、東予市三芳公民館発行の『ふるさと三芳 人物篇』（1991年）と田中武雄「杉正俊と『郷愁記』」（『東予史談』第5号、東予市史談会、平成12年）である。『ふるさと三芳 人物篇』は現代日本記録全集『青春の記録』（筑摩書房、1968年）を参照しているが、後者の田中の記事はこの『ふるさと三芳』を参考にしつつ、こう解説している、「杉正俊は、杉甚三郎四男として明治34年8月10日、三芳村23番戸に生れる。内剛の性と温和と親切で軟く包んで居た為、幼時より愛し親しまれた。小学校を卒て今治中学校に入学。此の間父及び二人の兄死亡。大正5年腹膜炎を病み、大正8年秋、悪質の盲腸炎で苦しみ中学校を中退。10年秋上京、郁文館中学4年に編入。12年三高入学。昭和2年母死亡。昭和4年京都帝国大学文学部哲学科卒業。哲学研究164号所載の論文『プラトンのイデアについて』は、卒業論文に加筆され発表。昭和5年文部省社会教育課に勤務。傍ら、東京帝国大学哲学科教室に通い研究を続ける。乏しい余暇のうちにリッカーートの『ヴィルヘルム・ヴィンデルバント』の翻訳（昭和6年10月）を世におくと共に、続いて、第二の論文プラトンのドクサ論（哲学研究190号所載）の業績を世に問う。昭和7年2月私費留学生として渡独。翌年2月肺結核にかかりサントブラジンの療養所へ入院。軽快に向うと思われし病も悪化、9年従弟医学博士杉稜一郎渡独、相伴ない神戸へ帰着。舞子病院に入院せしが、昭和9年10月13日死亡。享年33歳」とある。

彼が愛媛県の三芳村（東予地方、現西条市）に生まれ育ち、第三高等学校に進んでから、京都帝国大に進学し、卒業後役人になったが、やがてドイツに私費留学して、当地で結核を病み、帰国後亡くなったことが、ここからはわかる。ただし杉は昭和9年（1934年）に亡くなったとあるが、『郷愁記』によれば彼は昭和8年に亡くなっている。同じく、「9年従弟医学博士杉稜一郎渡独、相伴ない神戸へ帰着」とあるが、やはり『郷愁記』では「8年」である。父である甚三郎は『ふるさと三芳』によると、愛媛県会議員だった人で、明治37年に亡

<sup>4</sup> 筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波書店、2009年、65-67頁

くなっている。

以下、『郷愁記』およびその「あとがき」などを参照して筆者が経歴を補うと、杉正俊は京都帝国大学の哲学科で田辺元の指導を受けた哲学徒で、卒業後は文部省の社会教育課に勤めるかたわら東京帝国大や上智大に出入りし、プラトン研究に従事していた。リッカーの『ヴィルヘルム・ヴィンデルバント』を翻訳しながら、ハイデッガーにも関心を寄せていた。やがて上智大学のクラウド博士のすすめで1932年にドイツ留学を決意する。ドイツではアウフハウゼン教授のもとに止宿し、ミュンヘン大学で学んだが、程なく結核を発病、スイスのアグラに移る。そこにある学生用サナトリウムで療養するが、学問への志忘れがたく、病身のままフライブルクに移る。しかしお目当てのハイデッガーは休暇中で、講義を受けられなかった。カトリック修道尼の看護の甲斐もなく、ベッドから起きられなくなるほど結核を悪化させ、大学病院に入院する。そこからさらにサント・ブラジエンのサナトリウムに移るが、病状が急変し、1933年に帰国した。そして、その2か月後に垂水の舞子病院で亡くなっている。

その杉の遺した最後の日記二冊を、友たちが編集して出版したのが本書である。1939（昭和14）年発行の、杉正俊著、伊達四郎編『郷愁記：遺稿』（弘文堂）が初版で、著者の肖像写真と恩師である田辺元による「杉君を憶ふ」、論文「1 プラトンのアイデアについて」「2 プラトンのドクサについて」と「日記」（1932年5月26日から翌年1月26日まで）、そして「追想三題」（下村寅太郎「面影」、澤瀉久敬「友を悼む」、伊達四郎「故人の態度」）、「後記」で構成されている。この本は、1940（昭和15）年に杉著、下村寅太郎、澤瀉久敬、伊達四郎編で『郷愁記：若き哲学者の日記』として再版された。同書、及びその後の再版では編者は伊達（甲南高等学校教授）と下村（東京文理大学教授）、澤瀉（京都大学医学部講師）との連名となる。ここでは論文部分はカットされた。著者の友人たちの強い追慕の念が生み出したこの本は当初、一人の青年の「紙碑」にしようという意図がうかがえたが、やがて旧制高校などで愛読されることとなり、論文部分をカットして「青春」の書として位置づけられたと推察される。

戦後は同タイトルで1947年、48年に弘文堂から出版されて、プラング文庫にも加えられた。また1952年には創元文庫として、さらに1956年には角川文庫として再版されている。また、同タイトルで1965年には未来社から、そして1985年には灯影舎から灯影選書として出版された。

弘文堂の昭和15年の版、ならびにその後の再版では、編者「はしがき」が加えられた。昭和15年1月と記されている。そこでは、『哲学研究』に発表した学問的労作「プラトンのアイデアについて」「プラトンのドクサについて」は除いて、杉の残した日記22冊のうち、最後の21号、22号を掲載したとして、「故人が彼地に着くと暫くにして発した病を得てミュンヘンを去る日から、絶筆の日に至る。中判ノートに端正な細字で両面にわたって殆ど毎日記されている。故人の性格である」と解説している。田辺元「杉君を憶ふ」、「郷愁記」（「ミュンヘンを去る」「アグラにて」「フライブルクの冬空」）、追憶三篇（下村寅太郎「面影」、

澤瀉久敬「友を悼む」、伊達四郎「故人の態度」)、杉正俊氏記念事業会「重版に添えて」で構成されている。「重版に添えて」では、昭和15年に結成された「杉正俊氏記念事業会」が京都帝国大学学生の結核病の早期発見・治療の助成にあたることで、学徒保健事業に大きな足跡を遺してきたことが報告されている。そこでは「若し快くなったら—日本へ帰って、一つの運動をして学生サナトリウムの建設に努力し、そこで貧乏な哀れな学生達のために友として一生働きたい」という1933年(昭和8年)1月3日の杉の言葉を引いている。このように杉の遺志を継いだ学生サナトリウム建設について言及するのは、この時代において結核になった学生の困窮を救うという新たなミッションを本書から読み取り、これにそのような社会的意義を付与したためだろう。実際、本書では当時のドイツにおける社会制度や大学の福利厚生について述べられていて、学生サナトリウムや学生金庫、保険といった先進的な大学厚生制度やキリスト教会による慈善事業などが当時の日本の状況と比較されながら紹介されてもいたのである。杉正俊氏記念事業会による「重版に添えて」では「杉正俊氏は第三高等学校を経て本学文学部哲学科に学び、昭和4年業を卒え、プラトンの研究者として、真摯篤学の若き哲学学徒として将来を嘱望されていましたが、慥て昭和7年師友の期待を負うて独逸に渡りました。しかるに研学中、不幸胸に疾み、昭和8年8月病軀を支えて辛うじて故国に帰り、垂水の舞子病院で静養されましたが、同年10月13日34年の生涯を終えられました」と述べられている。また『郷愁記』は同氏の滞独中の日誌であり、生前異郷に於いて孤独と病苦と財政難と闘いながら、なおひたむきに真理への愛に生きたことの如何に烈しかったか、又純真にして濃やかな心情を懐きながら、なお哲人らしき雄々しさを以て傷しき運命を如何に静かに忍受されたかを物語るものであって、その高貴な魂の修業苦の跡を辿る時、人は自ら襟を正さざるを得ないでありましょう」としている。さらに、「令兄杉弘道氏の快諾を得た上、故人の師事した田辺・天野諸先生にも相談されて版權並びに印税を本会に移された」と出版の経緯を説明している。ちなみに、杉弘道とは正俊の長兄で、農務省に勤務していた。口絵として「ルガノ湖」「ノート原稿」(10月3日の日記の自著コピー)の写真が掲載されている。

1956(昭和31)年に出版された角川文庫の『郷愁記：若き哲学者の日記』でも、「ノート原稿」とアグラ近郊にあるルガーノ(ルガノ)湖の写真を掲げている。この版では「付録」として京都大学学長・服部峻治郎の「隅の首石」(昭和27年2月15日)を載せており、杉の学生サナトリウムの建設の遺志を紹介している。また同じく新たに収録された杉正俊氏記念事業会「学生サナトリウム建設の遺志」(昭和22年9月15日)では、「杉正俊氏記念療養資金」が作られ、これを母体に「杉正俊氏記念事業会」が結成された経緯が解説されている。この会は京都帝国大学学生の結核病の早期診断・治療の助成にあたり、学徒療養所の実現に努力してきたもので、この本の印税も本会に移すとしている。この結核療養助成活動の報告は、1950年代前半が結核罹患者数のピークだった時期であるために、ここに加えられたのであろう。結核罹患者数は1950年が53万人、51年が59万人だった。<sup>5</sup> ちなみ

<sup>5</sup> 竹内洋『教養主義の没落』中公新書、2003年、69頁

に、既出の田中武雄「杉正俊と『郷愁記』」では、その印税 250 円を京大学生課に寄付し、それをもとに「杉正俊記念療養資金」が設置されるとともに「京都大学杉正俊記念事業会」が創設されたと解説され、「当時、大学では、結核に悩む学生は 400 名も居り、この事業資金は恵まれない学生への福音となった」と述べられている。

一方、本書の1960年代以降の受容を見てみると、サナトリウム建設のためという社会的意義は後退し、ふたたび青春の書・人生の書として取り上げられるようになる。1967年には亀井勝一郎・臼井吉見編『死との対話 人生の本』4（文藝春秋）に「郷愁記」が抄録（1932年5月26日～33年1月26日分）され、1968年には久山康編『青春の記録』（『現代日本記録全集第16巻』（筑摩書房）に「アグラにて—郷愁記」として一部、採録されている。この本の巻頭にある久山と遠藤周作の対談「日本の青春」では、遠藤は藤村操を「ロマンティズムの影響」があるとして、『郷愁記』についてもセンチメンタルなところがずいぶんあるとしつつも年代的に「ああ、おれとそう違わない世代だな」という感じがしてくると述べている。また時代の雰囲気として杉が「どうしてもハイデッガーならハイデッガーというものと結びつかなければならなかった」という見方を示している。<sup>6</sup> 遠藤はまた近代化における「土着化」の問題を取り上げ、「青春の記録」というのは「つまり日本人というのが、明治以降いろんな思想を受けただけでも、それがどこまで日本人にとって本物であったか本物でなかったかという一つの記録だというふうにもいえる」<sup>7</sup> としている。ここからは、杉正俊の場合も西洋哲学思想の土着化の挫折ととらえられていたことがわかる。

以上のように、現代では忘れられている杉正俊の『郷愁記』は戦前から戦中にかけて、旧制高校・大学を中心に青春の書として愛読され、戦後も版を重ねていた。戦後の一時期、結核罹患学生の支援という社会的意義も加えられたが、その後「青春」や「死」との関連で再評価されたのである。

### 3、郷愁とは

それでは本書で描かれ、表現されていたものは何なのだろうか。本章では、表題ともなっている「郷愁」というキーワードからそれを読み解いてみたい。

「郷愁」について杉は、日本への郷愁ではないと何度も繰り返し述べている。Heimweh はより哲学的だとし、その郷愁に突き動かされてはるばるヨーロッパまで来たのだとする。ハイデッガーについては「郷愁」という点で親近感を感じていたのだろうが、『郷愁記』においては実のところ、ハイデッガーのことはさして評価していない。ハイデッガーの「故郷」という概念はドイツをギリシャと結び付け、「ギリシャへの憧れ」を通してドイツを故郷としたとされている。<sup>8</sup> 杉はそうしたハイデッガーの故郷観にたしかに影響を受けていたが、一方で1932年6月26日の日記には、「ハイデッガーなどの論文を読む。人の問題を単なる存在論として扱ったもの、それは結局乾からびた論文であって、私の心を掴む迫力がない。

<sup>6</sup> 久山康編『青春の記録』（『現代日本記録全集』第16巻）筑摩書房、1968年、15頁

<sup>7</sup> 同書、26頁

<sup>8</sup> 徳永恂『現代思想の断層～「神なき時代」の模索』岩波書店、2009年

物足らぬ所以である」<sup>9</sup>と述べており、あらためて読み返してみたハイデッガーをさして評価していない。あるいは、先述した遠藤周作が指摘していたように、杉は「時代の雰囲気」としてハイデッガーを不本意なうちに研究対象にしていたのかもしれない。

むしろ、ノヴァーリスのPhilosophie ist Heimwehという言葉を引き、哲学こそが郷愁なのだという。「Heimは決して日本—時空の中にあるのじゃない。それは永遠へのWehであり、Himmelweh! Idealweh! アイデアへのSehnsuchtである、それは謂わばUnruhe zum Gottである。こんな哲学的な深い悩み、イデアールな郷愁は...」<sup>10</sup>と、哲学の本質はこの郷愁に導かれて、どこまでも苦しみつつ努力し向上していくことだとする。「暗い未来に幽かな光明を求めて、前へ前へと只一すじに突き進んで行く。暗い(ドゥンケル)にはっきりとは分からないが併し何だか憧れの力をもっている理想(イデア)に向って、已むことなく向上努力してゆく一人の人間の生涯!それが人生の真の姿なのだ」<sup>11</sup>と述べている。

このように哲学的「郷愁」を追求しようと悪戦苦闘するのだが、彼はやはり病には勝てない。ときにヨーロッパの風景に心なごませ、心配してくれる異郷の人々の親切に涙しながら、その一方で「ああ亡き母の許へゆきたい。霊の故郷へ」<sup>12</sup>と母への追慕の念と日本への郷愁に身を焦がす。母を懐かしみながら自殺を何度思ったかしのれない。そのたびに夕暮れの間々の風景の情調に慰められ、思い直す、「そうだ、やはり人間は只努力するために生れて来たのだ。吾々は只まっしぐらに努力しつづけねばならない。それが吾々の運命であり本質なんだ」<sup>13</sup>と。このように、杉は哲学的使命感と個人的思い、コスモポリタンの理想と母国を懐かしむ気持ち、あるいは理想への希求と死へのあこがれとの間で葛藤にさいなまれていたのである。「出来るだけ日本人という意識(ベヴーストザイン)をなくして(人類愛のつもりで)人間として生活してゆきたいと考えるが、やはり時々日本人ということ強く感じさせられてしまう」<sup>14</sup>と述べ、「こんな所で一人寂しく病床にいと、やはり望郷の念も起って来る。心が弱ったせい、やっぱり日本で死にたいような気にもなる」<sup>15</sup>と言う。だが一方で、「私は日本の内に於て帰ってゆくべきホームがないんだ。もしこのまま日本に帰ったって、この病身を誰が迎え引きとってくれるか。勿論この病身では、自分自身では働くことは出来ない」<sup>16</sup>と、現実問題として日本にも自分の居場所などないとひどく悲観してしまう。そのあまり過去に現実逃避することもある。「楽しかった少年時代、受験に敗れて帰国した春夏初秋。それから高等学校一年時代!この頃までは何といてもやはり私には一番楽しかった」<sup>17</sup>と、青春時代を回想する。

彼はこのように哲学に殉じる覚悟で留学し、どこまでも哲学的郷愁に導かれていこうと

<sup>9</sup> 杉正俊『郷愁記』未来社、1969年、46頁

<sup>10</sup> 同書、36頁

<sup>11</sup> 同書、42頁

<sup>12</sup> 同書、46頁

<sup>13</sup> 同書、52頁

<sup>14</sup> 同書、59頁

<sup>15</sup> 同書、145頁

<sup>16</sup> 同書、145頁

<sup>17</sup> 同書、155頁

する一方で、実際のふるさとや個人的な思い出、日本という故郷への思いと、もはやどこにも居場所がないという現実的な意識との葛藤に苦しみ続けたのである。

ドイツ人の友人や知人もいたが、サナトリウムの中では日本人への偏見、好奇の眼差しに苦しんでもいる。また当時、台頭しつつあったナチスには批判的で、その暴力主義や異質なものを排除しようとするやり方を「文明の逆行、文化の低下、驚くべき素朴！」<sup>18</sup>と呼ぶ。杉が滞在していた頃には折しも、ナチスが1933年に議会で多数を取り政権を取ることとなるのだが、彼はアグラでの療養中の1932年7月31日にドイツの国会議会選挙の結果、ナチスが33%を獲得した時のことを書き留めている。そこで杉は、療養所でのナチスびいきの学生との議論の中でナチスのことを「ロゴスなき行動主義」として、その暴力を非難し、彼らのことを「羅針盤なき舟」だと断じている。<sup>19</sup> またその頃ドイツでは為替暴落があり、当初母の遺産や家族からの援助を得て用意していた留学資金の目減りにも苦しんだ。

この日記の最後では「それ（人生）は克服すべからざる運命との戦いである！」として「不断の努力」こそ人生だと、弱気になる自らを励ますように断言する。私費留学とはいえ当時の留学生たちの強い使命感と国家への忠誠心がうかがえるし、ヨーロッパの哲学思想への思いが留学生活における様々な苦しみに対して彼らを支えていたことがわかる。それと同時に、「悟りとは、いくら一心不乱に努力してもどうにもならない此の運命の不可超克を知って、ただ祈のうちに神に生きることである」<sup>20</sup>として、宗教的なものにも向かおうともしていたのである。

こうしてみると、杉の留学生活は日本の近代化における青春の純潔さゆえの活動とその悲劇だったといえる。『郷愁記』の「郷愁」とは異郷のヨーロッパに魂の「ふるさと」を求めた思いだったが、それと同時に囚らずも生まれ故郷・四国への「郷愁」でもあったのである。

#### 4、ふたつの故郷

杉はヨーロッパに哲学的故郷を求める一方で、四国・愛媛出身で、上述のように日記の中でもしばしば実際の故郷のことを思い浮かべていた。彼にはふたつの故郷があり、その間で内面を引き裂かれていたのである。ここでは、片山敏彦との比較から、この杉正俊にとっての故郷の意味を考究してみる。

同じ四国出身で杉と同世代であった片山敏彦（1898-1961）は法政大学教授だったが、杉とほぼ同じ時期である1929年から31年に滞欧していた。パリ、スイス、ドイツ、アルザスと巡り、ロマン・ロランやツヴァイク、シュヴァイツァーと交流している。片山の場合は、病に倒れることもなく、すでに身分も学者としての地位を築いていたことと、国際的な平和主義に連帯しようという強い思いがヨーロッパの知識人たちとの交流を可能にしていた。他方、杉は学徒として国に貢献しようとしてそれがかなわぬ思いにさいなまれていた。哲

<sup>18</sup> 同書、72-73頁

<sup>19</sup> 同書、66頁

<sup>20</sup> 同書、182頁

学に故郷を求めつつ、かえって実際の故郷への思いに囚われていくことに抵抗できなくなった。片山が故郷・高知への思いを生涯持ちつつ、ヨーロッパに自らが求め続けた「セレニテ（晴朗さ）」を見いだしたのとは対照的である。<sup>21</sup>

片山は1929年から2年間滞在するためにヨーロッパへ旅立った。その異郷の地においてもともと自らの中にあった志向性と出会うことになる。

「フランスへの回想」（1946年の『詩心の風光』に収載）で、彼はこんなことを述べている。

私はすでに二十年近くドイツ語およびドイツ文学に携わることを職としているけれども、フランスの文化や芸術に対する関心の原因は遠く自分の少年時代に胚胎している。南国の土佐に生まれて私は幼時から造型美術に強い興味を持っていたが、フランスの印象派と後期印象派との絵画が四国の土佐にまでも伝えられて、視覚世界に文字どおり新しい光の世界を示したのは、私などが15、6歳の頃であった。フランス文化は文芸よりも先に絵画を通して私の心に開かれていた。<sup>22</sup>

これはヨーロッパ遊学から帰ってからかなり経った戦時中のエッセイの一節であるが、片山は南国・土佐の生まれという点で、自分が造型美術への志向を抱きやすい性質を持つと考えていた。自分の気質が、フランス印象派の光の世界を受け入れやすかったというのも、造形芸術への志向性の強かった幼少のころからフランス文化や芸術に親しんできたためであるという。それゆえ、彼はヨーロッパに実際にやってきたとき、むしろ親近感や、ある種の懐かしさを抱くことができたのである。こうした志向性は杉の場合のように哲学や思想という面でヨーロッパに近づいていこうとした姿勢とはずいぶん異なる。片山の場合はたしかに、ドイツ文学に携わってきたのにそのドイツ的世界よりフランス的造型の世界に惹かれていくところに彼のねじれを見てとることも可能だが、その一方でそこにはある種の郷愁が作用していたのかもしれない。彼がフランスをパリではなく、田舎においてとらえていたことも、それと無関係ではないだろう。

片山は知人の勧めで、フランスの田舎の農村で過ごしたことがあった。そこで彼は人々の純朴さと歴史を慈しむ気風を感じとる。農婦がユゴーの詩を読み、宿屋の主人が詩句を暗誦するというように、「自然と生活との中に真実な『詩』があった」<sup>23</sup>としている。パリの作られた魅力とは異なる田舎の生活が、彼に対しては新しい文化に対して良きバランスとなっていた。そのフランスの地方の、新しさと古さとを綜合する「才能」に、彼は感嘆する。生活と芸術感覚とがよく調和している姿こそ、フランス文化の強さであるとして、その源をこの田舎の農村生活のあり様に見ていたのである。片山のフランス観は、都会のパリというよりは、むしろフランスの片田舎から得たものだった。このように、彼の地に

<sup>21</sup> 依岡隆児「片山敏彦の郷愁-戦時下における文学者に関する考察」『言語文化研究』Vol.22、2014年

<sup>22</sup> 『片山敏彦著作集』第8巻、みすず書房、1971年、155頁

<sup>23</sup> 同書、159頁

足のついた「開かれた志向」<sup>24</sup>は、国境や文化の違いを超えて、それを互いに照応させて、「大きな星座」を描いていたのである。

他方、杉の場合は、ドイツ語圏にとどまり、ミュンヘンやスイスの療養地、フライブルクで過ごしている。ミュンヘンでは人間関係や学問的環境には比較的恵まれたが、フライブルクでは大学にも失望し、病気が回復しないがゆえに大学と学問から遠ざかることに苛立ちを感じていた。プラトン研究者として、ヨーロッパに生まれた哲学に憧れ、特にノヴァーリス、および現代ではハイデッガーの郷愁の哲学に強く影響を受けていた。杉はそうした哲学のあり方を愚直なまで追い求めていた。一方で、その国際的な療養地の風景に心を慰めることはあっても、その向こうに日本の故郷を思い描いてしまうのをどうすることもできない。そこはあくまで異郷であり、そこに普遍的な「故郷」を見てとることはかなわず、杉は自らが生まれ育った四国をヨーロッパの哲学的故郷と重ね合わすことがとうとうできなかったのである。

以上のように、片山敏彦との比較からみると、杉のヨーロッパ滞在は自らの内面の分裂を痛感させられる体験となっていたといえよう。とはいえ、その引き裂かれた生身の自分を赤裸々に表現したことがかえって、戦時下においてそれを読む者により痛切に青春というものを伝えたことも否定できないだろう。哲学とは彼にとって、故郷を求めての苦行、「不断の努力」であり、そこに身を置くことでしか求めることができないものであったが、結局それは求めえなかった。その一方で、近代化のなかにあって哲学を土着化しきれずにいる生身の自分という存在にも向き合うこととなった。その意味で、彼にとって故郷とは最後まで現実の故郷・四国にあったのだ。その状況は当時の高校生・大学生たちにも共感できるものだったために、戦時下にあってもこの本は愛読されたのである。

## 5、おわりに

以上、本論では戦時下の旧制高校や大学で愛読された『郷愁記』を取り上げ、作者の杉正俊について調査し、本書の時代ごとの受容のあり方を跡づけ、「郷愁」の意味を考察してみた。杉はヨーロッパにおいて、夢見たものを求め続けたが、それはかなわなかった。そこでは彼は自ら求めていたものにたどりつけなかったし、そもそもそういう永遠の故郷などなかったのかもしれない。その徒労感と絶望感は、戦時下にあって現実と理想の間に引き裂かれていた若者たちにとって、決して他人事ではなかったのではないだろうか。

また本書の受容史を見るかぎりでは、こうした葛藤の中でもがき苦しむことこそが郷愁なのだと思われ受けとめられてきたことが推察される。その「郷愁」という概念自体が、ドイツから入ってきた思想の影響を受け、日本独特の展開を遂げたものでもあった。本稿では特に、ドイツの哲学からの影響を受けた郷愁が、ロマン主義的に故郷を求め続ける「不断の努力」自体にあると見られていたことも明らかにできた。この時代の郷愁、ならびにその元にある青春がドイツの影響を受けていたひとつの証左ともなるだろう。

<sup>24</sup> 川村二郎「謝恩の辞」『片山敏彦著作集』第5巻（「月報」2）みすず書房、1971年

## 参考文献

- 『片山敏彦著作集』第8巻、みすず書房、1971年  
亀井勝一郎・臼井吉見編『死との対話 人生の本』第4巻、文藝春秋、1967年  
川村二郎「謝恩の辞」『片山敏彦著作集』第5巻（「月報」2）みすず書房、1971年  
『関西大学学報』第179号、1940年  
杉正俊『郷愁記：遺稿』弘文堂、1939年  
杉正俊『郷愁記：若き哲学者の日記』弘文堂、1940年  
杉正俊『郷愁記：若き哲学者の日記』創元文庫、1952年  
杉正俊『郷愁記：若き哲学者の日記』角川文庫、1956年  
杉正俊『郷愁記：若き哲学者の日記』未来社、1965年  
杉正俊『郷愁記：若き哲学者の日記』灯影舎、1985年  
竹内洋『教養主義の没落』中公新書、2003年  
田中武雄「杉正俊と『郷愁記』」『東予史談』第5号、東予市史談会、2000年  
筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波書店、2009年  
徳永恂『現代思想の断層～「神なき時代」の模索』岩波書店、2009年  
ノーベル書房編集部編『ああ青春デ・カン・ショ～旧制高等学校物語～』ノーベル書房、1968年  
久山康編『青春の記録』（『現代日本記録全集』第16巻）筑摩書房、1968年  
『ふるさと三芳 人物篇』東予市三芳公民館、1991年  
ローデン、ドナルド・T.『友の憂いに吾は泣く～旧制高等学校物語』講談社、1983年